

藤原重人さん

1924(大正13)年11月19日生まれ

当時の本籍地 埼玉県

陸軍 歩兵

第27師団支那駐屯歩兵第3連隊

最終階級 兵長

華中～華南



●1944(昭和19)年9月1日 現役兵として入営、中国・九江へ

●1945(昭和20)年2月～7月 本隊を追及して3千キロの行軍

九江から武昌、長沙、衡陽、楽昌までの約3千キロを4ヶ月余りの長くて厳しい行軍が続いた。たくさん死んだ。

長い行軍で食料の補給は武昌と長沙だけ。食料交換用の食塩は貴重で、農家に行って米をもらった。それもなくなった。そうすると徵発しかない。最初なんかは「こんにちは」なんて入っていったけど、そのうち慣れて荒っぽくなってくる。それにまだ塩があるときは、かっぱらう訳じゃないからと思ったけど。

そのうち家のどこに食料があるか分かってくる。最初は10のうち7持っていたけど、10のうち10を持っていくようになつた。農家に行くと、てん足の老婆と3、4歳の幼い子が手を合わせて命乞いしていた。皆逃げ惑つて、命乞いする姿は哀れだった。

●クーリー(苦力と書く、労務者のこと)も徵発した。野良で働いている農夫を捕まえて、宿营地で監禁する。日本軍がいるときくと、そういう人の家族が探しにくる。「会わせてくれ」「帰してくれ」と紙に書いて訴える。漢字なので察しがつく。クーリーは帰りたいだろうが、100キロも行軍するともう家には帰れない。監視がなくなっても逃亡しなくなる。土地勘もないし、日本軍の後ろを匪賊が追ってくるのを知っているんだ。自分についたクーリーに「ライオン」と「桃太郎」と名前をつけていた。

●厳しい行軍で、水も悪くて下痢をする。初年兵はバタバタと死んでいく。弾にあたつて死ぬならまだいいけど、栄養失調で。10人の中で1人でもなると、みんなで荷物を分けて歩かせるが、2～3日で駄目になる。病院もないから駄目。クリークがずっと道端に続いている。3人ほど投げ込んだ。置いておくと余計かわいそう。共産軍が後を追っているから、投げ込むしかない。本当に頼るのは本人の体だけだから。水かけて励ましたって、目を開けず、呼吸を何とかしているだけなので、クリークに「水葬」するしかない。つらい。

行軍中に戦況は悪化して作戦が放棄され、本隊は瓦解してしまつた。第131師団独立歩兵第596部隊に転属して、楽昌で警備につく。

●1945(昭和20)年8月 引き上げ行軍

作戦が見送られた後、私たちは「肅清作戦」と言つていっせいに退却した。「肅清」なんていい言葉、要は前線が退却したの。その途中で終戦の詔書を知つた。引き上げ行軍になった。鉄兜もかぶらず、銃もだらしなく扱いだ日本の敗残兵が行くと、蒋介石の統治下だったし小競り合いはなかったけど、中国の子供が「チャンコロ、チャンコロ」と言つてくる。きっと日本語で「弱い」とかそういう意味だと思ったんでしょう。

自分の2人のクーリーは、日本が負け戦になつて、日本軍と一緒に行けば自分の故郷に近づけるから一緒に行きたいと言つてきた。自分の故郷に近づいたとき、朝の3時半くらいでまだ暗い時分に起こされて、挨拶をしてくれた。自分のいた部隊はクーリーに随分助けられた。

引き上げ行軍中に倒れた。クーリーが自分の分の荷物をかついてくれたが、本隊には置いていかれて周囲は真っ暗になつて、もうだめだなと思った。でもクーリーは介抱してくれて、「シーさんシーさん、行こう行こう」と励ましてくれた。あのクーリーに救われていま私は生きているわけです。彼がいなかつたら私は20歳であそこで死んでいた。どうして名前を聞かなかつたのか。戦後、クーリーたちは日本に協力したということでひどい目に会わされたようだ。

●1945(昭和20)年10月15日 安慶捕虜集中営に収容

私たちの部隊はどういうわけか翌年3月まで武装解除されなかつた。食事も十分、仕事も大してない。揚子江でモッコで土を運んだ程度。政府軍は八路軍とどんぱちやるから日本軍の力を借りようという話だったようだ。

(取材日:2008年11月16日)